

# 日本語と中国語における 結果を表す複合動詞 —後項動詞の意味解釈を中心に—

崔 玉花

## 要 旨

本稿は日中両言語において結果を表す複合動詞を取り上げ、後項動詞が文の中でどの要素と意味関係をもつのかという点に注目し、両言語の結果複合動詞に見られる共通点と相違点を体系的に捉える。日本語では後項動詞が主語とのみ意味関係をもつものに対して、中国語では主語と目的語の両方と意味関係をもつことができる。本稿は後項動詞の意味解釈において日中両言語に見られる違いは、主要部位置の違いに起因すると論じる。

## キーワード

結果複合動詞 後項動詞 意味解釈  $\theta$  役割 主要部

## 1 はじめに

日本語にも中国語にも結果を表す複合動詞が存在する。本研究でいう日本語の結果複合動詞には、松本(1998)の分類で前項が後項の手段あるいは原因を表すとされる「押し倒す」や「歩き疲れる」のような複合動詞が含まれる<sup>1</sup>。日本語と中国語の結果複合動詞は、前項で原因となる動作を表し、後項でその結果を表すという意味構造をもつという点では共通するものの、いくつかの重要な相違点も存在する。すでに多くの研究者によって指摘されているように、日本語と中国語の結果複合動詞は、結果の表し方において異なる振る舞いを見せる。

(1) a. 太郎が次郎を押し倒した/\*倒れた。

b. 张三 推 倒 了 李四。

張三 押し-倒れる Asp 李四

<sup>1</sup> 研究者によって、日本語複合動詞に関する分類が若干異なる。松本(1998)は、日本語複合動詞を前項が後項の「手段」を表すもの、「様態・付帯状況を」表すもの、「原因」を表すもの、「背景的情報」を表すもの、「前項動詞を意味的主要部とするもの」に分類している。一方、影山(1993)は、松本(1998)で「手段」と「原因」の複合動詞と呼ばれるものを「手段・様態」の複合動詞と呼んでおり、「原因」の複合動詞は設けていない。

(1)に示すように、AがBを押した結果Bが倒れたという事象を表すのに、中国語ではストレートに自動詞を用いてその結果を表すのに対して、日本語では間接的に結果を含意する他動詞を用いている。

また、次の例文では日中両言語ともに後項動詞が非対格自動詞の場合であるが、その意味解釈においては異なる振る舞いを見せる。

(2) 太郎が次郎を叱り疲れた。

“太郎が次郎を叱って、太郎/\*次郎が疲れた”

(3) 张三 追 累 了 李四 了。

Zhangsan 追う-疲れる Asp Lisi LE

“張三が李四を追って、張三/李四が疲れた”

(4) a. 彼女が踊り飽きた。

b. \*彼女が太郎を踊り飽きた。

(5) a. 她 跳 烦 了。

彼女 踊る-飽きる Asp

“彼女が踊って、彼女が飽きた”

b. 她 跳 烦 了 李四 了。

彼女 踊る-飽きる Asp 李四 LE

“彼女が踊って、李四が飽きた”

(2)(3)における日本語の「叱り疲れる」と中国語の“追累”はともに「他動詞+非対格自動詞」の組み合わせであるが、日本語の例文(2)は、太郎が次郎を叱った結果として主語である太郎が疲れたという一通りの解釈しかできないのに対して、中国語の例文(3)は、張三が李四を追いかけた結果として、目的語である李四が疲れたという解釈と、主語である張三が疲れたという二通りの解釈ができる。(4)(5)における日本語の「踊り飽きる」と中国語の“跳烦”はともに「非能格自動詞+非対格自動詞」の組み合わせであるが、日本語の「踊り飽きる」は、目的語を伴うことができず、彼女が踊った結果として主語である彼女が飽きたという解釈しかできない。これに対して、中国語の“跳烦”は、目的語の有無によって、主語である彼女が飽きたという解釈と、目的語である李四が飽きたという解釈が可能である。

このように、日中両言語の結果複合動詞は共通点をもつ一方で、重要な相違点も存在する。そこで本研究では、後項動詞が文の中でどの要素と意味関係をもつのかという点に注目し、日中両言語の結果複合動詞に見られる共通点と相違点を統一的かつ体系的に捉えることを目標とする。

## 2 二つの原則と日本語と中国語の結果複合動詞

本節では、まず、日本語複合動詞の組み合わせを説明するために提案された「他動性調和の原則」と「主語一致の原則」を検討する。次に、具体的なデータに基づいて二つの原則が中国語結果複合動詞には適用されないことを示す。

### 2.1 二つの原則と日本語の結果複合動詞

影山(1993)は、日本語の複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二つのタイプにわけ、語彙的複合動詞の組み合わせは「他動性調和の原則」によって制約されると言う。この原則によれば、動詞と動詞の組み合わせにおいて同じタイプの項構造、すなわち外項を取る動詞(他動詞と非能格自動詞)同士か、外項を取らない動詞(非対格自動詞)同士が複合される。(6)は、日本語において可能な結果を表す語彙的複合動詞の組み合わせであるが、その中には「他動性調和の原則」に従わない組み合わせも存在する。

- (6) a. 他動詞+他動詞：押し倒す、殴り殺す、押しつぶす、たたき落とす
- b. 非能格自動詞+他動詞：泣きはらす、泣き濡らす、泣き落とす
- c. 非対格自動詞+非対格自動詞：焼け死ぬ、抜け落ちる、あふれ落ちる
- d. 他動詞+非対格自動詞：(太郎が)読み疲れる、飲みつぶれる、食いつぶれる
- e. 非能格自動詞+非対格自動詞：(太郎が)歩き疲れる、走りくたびれる、泣き沈む

(6a)-(6c)は同じく外項を取る動詞同士の組み合わせであり、「他動性調和の原則」で説明できる。一方、(6d)(6e)は異なる項構造をもつ動詞同士の組み合わせであり、明らかにこの原則で説明できない。

由本(1996)、松本(1998)によって提案されている「主語一致の原則」とは、二つの動詞の主語として実現する項が同一物を指す、というもので、主語になるものであれば外項同士(あるいは内項同士)である必要はない。この点で「他動性調和の原則」よりも緩い制約である。この原則によれば、「他動性調和の原則」で説明できない(6d)(6e)も説明できる。

「主語一致の原則」に関して一つ注意すべきことは、この原則が全ての複合動詞に当てはまるものとして提案されたわけではなく、二つの動詞の直接の複合から生じたと考えられる複合動詞にのみ当てはまる原則であるという点である。

- (7) a. 踏み固まる、突き刺さる、覆い被さる、擦り切れる、擦りむける、張り付く
- b. 踏み固める、突き刺す、覆いかぶせる、擦り切る、擦りむく、張り付ける
- (8) a. 地面が踏み固まった。
- b. 責任が覆い被さってきた。

(7a)は「他動詞+非対格自動詞」の組み合わせで、松本の分類では前項が後項の原因を表す

とされる複合動詞である。これらの複合動詞は、(8)に示すように、前項の目的語に当たる項と後項の主語に当たる項が同一であり、一見この原則に対する反例となる。松本(1993:57)は、このような主語不一致型の複合動詞は、対応する複合他動詞、つまり主語一致型の複合他動詞が存在する場合にのみ許されるとし、(7a)は(7b)からの自動詞化によって作られたものとみなす<sup>2</sup>。(7a)が直接の複合によって作られた複合動詞でないため、「主語一致の原則」の対象外と見なされる。

## 2.2 二つの原則と中国語の結果複合動詞

(9)は、中国語において可能な結果を表す複合動詞の組み合わせである。日本語では何らかの状態/位置変化を表す他動詞が後項動詞となる組み合わせが大半を占める(影山1993)。これに対して、中国語では“～会、～懂”などの他動詞を除いては、基本的に非対格自動詞が後項動詞を担う。

### (9) a. 他動詞+他動詞

学会(学ぶ-できる)、听懂(聞く-理解する)

### b. 他動詞+非対格自動詞

推倒(押す-倒れる)、打死(殴る-殺す)、推开(押す-開ける)、骑累(乗る-疲れる)

### c. 非能格自動詞+非対格自動詞

哭湿(泣く-濡らす)、哭肿(泣く-腫れる)、跑累(走る-疲れる)、跳烦(踊る-飽きる)

### d. 非対格自動詞+非対格自動詞

醉倒(酔う-倒れる)、累坏(疲れる-壊れる)、摔倒(転ぶ-倒れる)

異なる項構造をもつ動詞同士の組み合わせである(9b)(9c)は、明らかに「他動性調和の原則」で説明できない<sup>3</sup>。

「主語一致の原則」によれば、前項の主語と後項の主語が一致しなければならない。しかし、中国語では(10a)-(12a)に示すように、後項動詞の主語が、前項動詞の主語と一致する場合、目的語と一致する場合、どの項とも一致しない場合がある。それに対応する日本語の結果複合動詞は(10b)-(12b)に示すように、いずれも「主語一致の原則」に従う。

### (10) a. 他 跑 累 了。

彼 走る-疲れる Asp

<sup>2</sup> 影山(1993)ではこのような操作を逆形成と呼ぶ。「他動性調和の原則」も実は直接の複合によって作られた複合動詞のみに当てはまる原則なので、(4a)もこの原則の対象外となる。しかし、対応する複合他動詞形をもたない「書き疲れる」のような複合動詞は、やはり「他動性調和の原則」で説明できない。

<sup>3</sup> 影山(1993)は、中国語結果複合動詞が語彙部門の中の意味構造のレベルで形成されているので、「他動性調和の原則」が適用されないという。中国語結果複合動詞の形成部門を巡っては、語彙部門での形成と見なす立場(Li 1990, 1993; Cheng&Huang 1994; 申 2007)と統語部門での形成と見なす立場(Sybesma 1999)で議論が分かれている。

- b. 彼が走り疲れた。
- (11) a. 他 打 死 了 老虎。  
彼 殴る-死ぬ Asp 虎
- b. 彼が虎を殴り殺した。
- (12) a. 她 哭 湿 了 手帕。  
彼女 泣く-濡れる Asp ハンカチ
- b. 彼女がハンカチを泣き濡らした。

以上に示したように、中国語結果複合動詞は「他動性調和の原則」と「主語一致の原則」に従わない。「主語一致の原則」によれば、後項動詞の意味解釈は狭い範囲に限定され、複合動詞全体の主語とのみ意味関係をもつことが予想される。実際、冒頭に示したように、日本語結果複合動詞はこの原則に従い、後項動詞は主語とは意味関係をもつが、目的語とは意味関係を持たない。これに対して、中国語結果複合動詞はこの原則に従わず、後項動詞が主語と目的語の両方と意味関係もち、解釈の曖昧性が生じることも可能である。

では日中両言語の結果複合動詞はなぜ後項動詞の意味解釈において異なる振る舞いを見せるのか。次節ではこの問題をLi (1990, 1993)で提案されている「主要部素性浸透公約」に基づいて体系的に捉える。本稿は、後項動詞の意味解釈において両言語間に見られる違いは、主要部位置の違いに起因すると主張する。

### 3 分析

本節では、まず、中国語結果複合動詞における項構造の問題を論じているLi (1990, 1993)を概観する。次に、Liで提案されている「主要部素性浸透公約」に基づいて、日中両言語に見られる相違点を体系的に捉える。

#### 3.1 Li (1990, 1993)

Liは、中国語結果複合動詞全体の項構造は前項動詞と後項動詞の項構造に基づいて決定されるものの、その項構造の組み合わせは次のような原則によって制約されると言う。

- (13) a.  $\theta$  役割卓越順序原則 (Theta-role Prominency)  
動詞の $\theta$  役割は一定の卓越順序に基づいて付与される。
- b.  $\theta$  同定 (Theta Identification)  
二つの異なる動詞からの $\theta$  役割が同定され、同じ名詞句に付与される。
- c. 主要部素性浸透公約 (Head-feature Percolation)  
複合語における主要部の $\theta$  役割卓越順序の情報が複合語全体の項構造に受け継がなければならない。

3つの制約について簡単に説明すると、まず「 $\theta$  役割卓越順序原則」とは、Williams (1981) 及び Grimshaw and Mester (1988) の「 $\theta$  役割は階層性をもつ」という主張に基づくものであるが、これは「最も卓越性の低い、即ち一番右側にある  $\theta$  役割が、最初に  $\theta$  役割付与を受ける」という原則である。例えば、動詞 give では、 $\langle \text{Agent}, \langle \text{Goal}, \langle \text{Theme} \rangle \rangle \rangle$  という順番で階層性を示し、そのうち最も卓越性の低い、即ち一番右側にある Theme が最初に目的語位置に付与され、次に Goal が、最後に最も卓越性の高い Agent が主語位置に付与される。次の「 $\theta$  同定」は格理論からの帰結であると言える。格理論によれば、すべての顕在的な名詞句には必ず格が与えられなければならない。複合動詞の場合、通常主格と対格という二つの構造格しか与えられないため、前項動詞と後項動詞のそれぞれの  $\theta$  役割の合計が2つを超える場合、必ず  $\theta$  同定が起らなければならない。最後の「主要部素性浸透公約」は、主要部の  $\theta$  役割卓越順序が複合動詞全体の項構造において保持されなければならないという制約である。

中国語結果複合動詞における主要部を巡っては議論の分かれるところであるが、Li の一連の研究では、一貫して中国語結果複合動詞における主要部は前項動詞であり、複合動詞全体の項構造は上記の制約によって正しく予測できるという。次の例文の表記において V1 は前項動詞、V2 は後項動詞を表し、 $\theta 1$  及び  $\theta a$  は、それぞれ V1 及び V2 の主語、 $\theta 2$  及び  $\theta b$  は、それぞれ V1 及び V2 の目的語を表す<sup>4</sup>。

(16) V1  $\langle \theta 1 \langle \theta 2 \rangle \rangle$ ; V2  $\langle \theta a \langle \theta b \rangle \rangle$

a. 他 背 会 了 这 首 诗。

彼 暗記する-マスターする Asp この CL 詩

“彼はこの詩を暗記して自分のものにした。”

$\langle \theta 1 - \theta a \langle \theta 2 - \theta b \rangle \rangle$

b. \*这 首 诗 背 会 了 他。

この CL 詩 暗記する-マスターする Asp 彼

$\langle \theta 2 - \theta b \langle \theta 1 - \theta a \rangle \rangle$

(16)は V1 と V2 とともに2項述語の場合であるが、 $\theta$  役割の合計が2つを超えるため、 $\theta$  同定が起こっている。(16a)では、主要部 V1 の二つの意味役割  $\theta 1$  と  $\theta 2$  が  $\theta$  役割卓越順序原則に基づいて複合動詞全体に受け継がれているため、「主要部素性浸透公約」により、適格文となる。一方、(16b)では、主要部 V1 の一番卓越性の高い意味役割  $\theta 1$  が複合動詞全体の主語ではなく目的語位置に付与されているため、「主要部素性浸透公約」により、非文となる。つまり、「主要部素性浸透公約」によれば、中国語結果複合動詞における主要部 V1 の主語は必ず複合動詞全体の主語でなければならない。

<sup>4</sup>  $\theta 1$  及び  $\theta a$  が外項、 $\theta 2$  及び  $\theta b$  が内項を表すわけではない。

### 3.2 「主要部素性浸透公約」と日本語の結果複合動詞

よく知られているように、日本語では統語構造、形態構造ともに右側要素が主要部として機能するのが一般的原則である。複合動詞の場合も並列関係の例を除いては、後項動詞が主要部であることが指摘されている(影山1993)。次の(17)は、日本語結果複合動詞全体の項構造がV2の項構造に基づいて決定されることを示している。

- (17) V1: <θ1<θ2>>; V2: <θa>  
 a. 地面が踏み固まった。 <θ2-θa>  
 b.\*太郎が地面を踏み固まった。 <θ1 <θ2-θa>>  
 (18) V1: <θ1<θ2>>; V2: <θa<θb>>  
 太郎が地面を踏み固めた。 <θ1-θa <θ2-θb>>

(17)におけるaとbの差は、複合動詞全体の項構造が後項動詞の項構造を受け継ぐ場合は適格文となるのに対して、前項動詞の項構造を受け継ぐ場合は非文となることを示している。この違いを「主要部素性浸透公約」に基づいて捉えると、(17a)では主要部V2の意味役割θaが主語位置に付与されているため、適格文となり、(17b)ではV2の意味役割θaが目的語位置に付与されているため、非文となると考えられる。つまり、日本語では主要部V2のθ役割卓越順序が複合動詞全体の項構造において保持される場合にのみ適格文となる。一方、(18)における複合動詞「踏み固める」では、主要部V2の二つの意味役割θaとθbがそれぞれ主語と目的語位置に付与され、θ役割卓越順序が複合動詞全体の項構造において保持されているため、容認される。

(17a)は「主語一致の原則」の例外と扱われている現象であるが、「主要部素性浸透公約」に基づくと、主語不一致型の複合動詞も主語一致型の複合動詞もこの制約によって統一的に分析できる。

### 3.3 後項動詞の意味解釈に見られる相違についての説明

本節では、冒頭に示した日本語と中国語の結果複合動詞に見られる相違を「主要部素性浸透公約」に基づいて捉える。

#### 3.3.1 「他動詞+非対格自動詞」の組み合わせ

中国語の結果複合動詞“追累”と“骑累”は、次に示すように、後項動詞の意味解釈において曖昧性が生じる。

- (19) 张三 追 累 了 李四。  
 張三 追う-疲れる Asp 李四  
 V1: <θ1<θ2>>; V2: <θa>

- a.  $\langle \theta 1 \ \langle \theta 2-\theta a \rangle \rangle$  (張三が李四を追って李四が疲れた)  
 b.  $\langle \theta 1-\theta a \ \langle \theta 2 \rangle \rangle$  (張三が李四を追って張三が疲れた)
- (20) 他 骑 累 了 马 了。<sup>5</sup>  
 彼 乗る-疲れる ASP 馬 LE
- a.  $\langle \theta 1 \ \langle \theta 2-\theta a \rangle \rangle$  (彼が馬に乗って馬が疲れた)  
 b.  $\langle \theta 1-\theta a \ \langle \theta 2 \rangle \rangle$  (彼が乗馬して彼が疲れた)

(19)(20)では、後項動詞“累”の意味役割  $\theta a$ が前項動詞の  $\theta 2$ と同定される場合、目的語志向の解釈となり、 $\theta a$ が前項動詞の  $\theta 1$ と同定される場合は、主語志向の解釈となる。中国語においてこのような二通りの解釈ができるのは、V1が主要部のためであると考えられる。つまり、主要部V1の二つの意味役割  $\theta 1$ と  $\theta 2$ がそれぞれ主語と目的語の位置に付与され、「主要部浸透公約」に従っているため、V2の意味役割  $\theta a$ が前項動詞の  $\theta 1$ と同定される解釈も  $\theta 2$ と同定される解釈も許されると考えられる。

しかし、中国語の“追累”同様、他動詞と非対格自動詞の組み合わせである日本語の「叱り疲れる」では、解釈の曖昧性が生じない。

- (21) 太郎が次郎を叱り疲れた。  
 V1:  $\langle \theta 1 \ \langle \theta 2 \rangle \rangle$  ; V2:  $\langle \theta a \rangle$
- a.  $\ast \langle \theta 1 \ \langle \theta 2-\theta a \rangle \rangle$  (太郎が次郎を叱って次郎が疲れた)  
 b.  $\langle \theta 1-\theta a \ \langle \theta 2 \rangle \rangle$  (太郎が次郎が叱って太郎が疲れた)

(21)に示したように、後項動詞「疲れる」の意味役割  $\theta a$ が主語位置に付与される解釈は許されるのに対して、目的語の位置に付与される解釈、つまり目的語の「次郎が疲れた」という解釈は許されない。これは日本語の結果複合動詞における主要部がV2のため、「主要部素性浸透公約」により、V2の意味役割  $\theta a$ が必ず主語位置に付与されなければならないことに起因すると考えられる。

結果の表し方において、両言語の結果複合動詞に見られる次のコントラストも、主要部位置の違いにより説明できる。

- (22) a.  $\ast$ 太郎が次郎を押し倒れた。  
 $\langle \theta 1 \ \langle \theta 2-\theta a \rangle \rangle$   
 b. 太郎が次郎を押し倒した。  
 $\langle \theta 1-\theta a \ \langle \theta 2-\theta b \rangle \rangle$

<sup>5</sup> 主語志向の解釈が目的語「馬」が非指示的名詞の場合のみ可能で、「あの馬」のような指示的名詞句になると、目的語志向の解釈しかできないことがしばしば指摘されている(Cheng & Huang 1994, Huang 2006)。一方、“追累”では、(19)に示すように、目的語が指示的名詞であっても二通りの解釈ができる。

(23) 张三 推 倒 了 李四。

張三 押す-倒れる Asp 李四

<θ 1 <θ 2-θ a>>

(22a)が非文となるのは、主要部 V2 の唯一の意味役割 θ a が主語位置ではなく、目的語位置に付与されているためであると考えられる。一方、(22b)のように後項動詞が他動詞「倒す」の場合は、「倒す」の二つの意味役割 θ a と θ b がそれぞれ複合動詞全体の主語と目的語の位置に付与され、主要部 V2 の θ 役割卓越順序が複合動詞全体に正しく受け継がれているため、容認されると考えられる。一方、中国語では V1 が主要部であるため、V2 の意味役割 θ a が V1 の θ 2 と同定され、目的語位置に付与されることが可能であると考えられる。

### 3.3.2 「非能格自動詞+非対格自動詞」の組み合わせ

日本語の「踊り飽きる」と中国語の「跳烦」はともに非能格自動詞と非対格自動詞の組み合わせであるが、項の同定がなされない二項動詞の形成を許すか否かにおいて、異なる振る舞いを見せる。後項動詞の意味解釈も項の同定が許されるか否かによって、異なってくる。

(24) <θ 1-θ a><sup>6</sup>

a. 彼女が踊り飽きた。

b. 她 跳 烦 了。

彼女 踊る-飽きる Asp

(25) <θ 1 <θ a>>

a. \*彼女が太郎を踊り飽きた。

b. 她 跳 烦 了 李四 了。

彼女 踊る-飽きる Asp 李四 LE

(26) 哭醒(泣く-目が覚める)、咳醒(咳する-目が覚める)、笑醒(笑う-目が覚める)

自動詞同士の結合である「跳烦」と「踊り飽きる」は、前項動詞と後項動詞の意味役割の合計が二つを超えないため、θ 同定が適用されない二項動詞の項構造も許されると考えられる。ところが、中国語では上記に示したように、項の同定が起る場合と起らない場合の 2 つの項構造の組み合わせが可能であるのに対して、日本語では(25a)に示したように、項の同定がなされない項構造は許されない。この差も主要部位置の違いに基づいて説明で

<sup>6</sup> 非能格動詞と非対格動詞が結合して一項動詞を形成する場合、主語の同定が外項と内項の間で行われており、全く異質な意味役割の同定と考えられる。なぜこのような同定が可能であるのか、Li の θ 同定をもっと厳密に解釈する必要があると考えられる。

きる。つまり、(25a)が非文となるのは、主要部 V2 の意味役割  $\theta a$  が主語位置ではなく、目的語位置に付与されているため、「主要部素性浸透公約」により排除されると考えられる。一方、中国語では V1 が主要部であるため、V1 の意味役割  $\theta 1$  が主語位置に付与されれば、V2 の意味役割が主語と目的語のどの位置に付与されても構わないのである。つまり、V2 の意味役割  $\theta a$  が V1 の  $\theta 1$  と同定され、主語位置に付与される場合は、主語志向の解釈となり、目的語の位置に付与される場合は、「張三が踊って、李四が飽きる」という目的語志向の解釈となる。(26)に示した中国語結果複合動詞も項の同定が起こる項構造と起こらない項構造の両方が可能である。

また、日中両言語の結果複合動詞に見られる次のコントラストも、主要部位置の違いにより説明できる。

(27) a. \*彼女がハンカチを泣き濡れた。

<  $\theta 1$  <  $\theta a$  >>

b. 彼女がハンカチを泣き濡らした。

<  $\theta 1$ - $\theta a$  <  $\theta b$  >>

(28) 她 哭 湿 了 手帕。

彼女 泣く・濡れる Asp ハンカチ

<  $\theta 1$  <  $\theta a$  >>

(27a)が非文となるのは、主要部 V2 の意味役割  $\theta a$  が主語位置ではなく、目的語位置に付与されているためであると考えられる。一方、(27b)のように、後項動詞が他動詞「濡らす」の場合は、「濡らす」の二つの意味役割  $\theta a$  と  $\theta b$  がそれぞれ複合動詞全体の主語と目的語の位置に付与され、主要部 V2 の  $\theta$  役割卓越順序が複合動詞全体に正しく受け継がれているため、適格文になると考えられる。一方、中国語では主要部が V1 であるため、その意味役割  $\theta 1$  が主語位置に付与されれば、V2 の意味役割  $\theta a$  が目的語位置に付与されても構わないのである。したがって、項の同定が起こらない「非能格自動詞+非対格自動詞」の組み合わせが許されると考えられる。

#### 4 まとめ

本稿は、後項動詞が文の中でどの要素と意味関係をもつのかという点に注目し、日中両言語の結果複合動詞に見られる相違点を Li(1990, 1993)で提案されている「主要部素性浸透公約」に基づいて体系的に捉えた。日本語では後項動詞が複合動詞全体の主語とのみ意味関係をもつものに対して、中国語では主語とも目的語とも意味関係をもつことができる。本稿は日中両言語の結果複合動詞に見られるこのような違いは、主要部位置の違いに起因すると主張した。

今後の課題として、本稿では日中両言語の結果複合動詞に見られる違いが主要部位置の違いに起因すると主張しているものの、独自のデータを用いて両言語の複合動詞の主要部が異なることを裏付けたわけではない。特に、中国語では結果複合動詞における主要部を巡っては議論の分かれるところであるが、今後はもっと具体的なデータに基づいて V1 が主要部であることを検証する必要があると考えられる。また、本稿では V2 の意味解釈に注目して議論を進めてきたが、実は中国語の“张三追累了李四”という文は「(張さんが逃げたので)李四が張三を追って李四が疲れた」という解釈も可能である。しかし、日本語ではこういった解釈が許されない。なぜ中国語ではこういった解釈が許されるのかという問題については、主要部の問題と関連づけてさらに検討すべきである。

### 参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房。
- 申垂敏 (2007) 「中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」 『レキシコンフォーラムⅢ』 195-229.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 114:37-83.
- 望月圭子 (1990) 「日中両語の結果を表す複合動詞」 『東京外国語大学論集』 40:13-27.
- 由本陽子 (1996) 「語形成と語彙概念構造」 奥田博之教授退官記念論文集刊行会編『言語と文化の諸相』 105-118, 英宝社.
- 沈家煊 (2004) 「动结式“追累”的语法和语义」 『语言科学』 6: 3-15.
- Cheng, Lisa Lai-Shen and Huang, C.-T. James (1994) On the Argument Structure of Resultative Compounds. In: Matthew Chen and Ovid Tzeng (eds.), *In Honor of William S.Y. Wang: Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*. 187-221. Pyramid Press, Taipei.
- Grimshaw, Jane and Armin Mester (1988) Light verbs and  $\theta$ -marking. *Linguistic Inquiry* 19: 205-232.
- Huang, C.T.J. (2006) Resultatives and Unaccusatives: a Parametric View. 『中国語学』 253: 1-43.
- Li, Yafei (1990) On V-V Compounds in Chinese. *Natural Language and Linguistics Theory* 8: 177-207.
- Li, Yafei (1993) Structural head and aspectuality. *Language* 69: 480-504.
- Li, Yafei (1995) Thematic hierarchy and causativity. *Natural Language and Linguistic Theory* 13: 255-282.
- Sybesma, Rint (1999) *The mandarin VP*, Kluwer Academic Publishers.
- Williams, Edwin (1981) Argument structure and morphology. *The Linguistic Review* 1: 81-114.
- (崔玉花 延辺大学)

# On Resultative V-V Compounds in Japanese and Chinese: Focusing on second verb's expression

Yuhua Cui

This paper discusses the difference and sameness between Japanese and Chinese Resultative V-V compounds focusing on the second verb's explanation. Though both Japanese and Chinese allow resultative V-V compounds, Japanese resultative V-V compounds do not show the semantic ambiguities that their Chinese counterparts have. I argue that this difference results from the different locations of the morphological head in two languages.